

レスポンスビリティの会計学

会計で世界を変えるには

2022年10月1, 2日
会計理論学会統一論題

神戸大学経営学研究科
國部克彦

kokubu@kobe-u.ac.jp

「人生の目的とは人々に目的を与えることである。
そうすれば社会は繁栄し、世界は存続する。」

Colin Mayer, *Prosperity: Better Business Makes the greater good*, Oxford University Press, 2018, p.31 (『株式会社規範のコペルニクスの転回』東洋経済新報社)



現代社会の課題と解決への道

- 3つの主要な課題

①大規模な環境破壊, ②経済格差, ③社会の仕組みの崩壊
「新たな法律と新たな規制の整備と同じくらいに, 新たな行動様式, 思考様式が求められる。」

→パーパス経営＝企業の目的と利益の境界を探っていくこと

(レベッカ・ヘンダーソン『資本主義の再構築』2020年)

- 企業の目的と利益の境界を考えるために会計が果たすべき役割とは何か



会計計算が世界を「創る」

- 政府, 会社, 各種公共団体, 家計, 個人は, すべて会計計算単位として構築されている
→ 予算, 所得, 納税を通じて対象が捕捉される
- 市場は会計計算の共通化によって成立する
- 会計は標準化を通じて, 経済的な「公共空間」(市場や組織)を創造する
- 会計は経済という「公共空間」を開く(=囲い込む)ことで, 人間を自然から隔離し, 自然を排除する→人間の尊厳と対立

⇒現代社会の問題がグローバリズムの結果であり, その本質が経済現象であるとするれば, 経済の形式である会計計算を変えることが必要

会計の能動的役割の本質

- 銀行から3000万円借り入れた場合の計算
銀行 貸出金 3000万円 預金 3000万円
あなた 預金 3000万円 借入金 3000万円
→貸し出す3000万円を担保に3000万円の通貨(預金)を創造
- すべての通貨は、債権と債務の同時記録(複式簿記)から創造される→通貨の本質は「債務証書」
- 私たちは会計(経済計算)によってすでに未来(目的)を消費している→人間は未来に対する負債(liability)を返済するためだけに生きているのか？

神から計算へ

「宗教制度の腐敗によって、規範や宗教、道徳への確信といったものが荒廃し、代わって計算が確信の中心的な源泉として登場したのだった。計算によって証明し、組み立て、予測できるものは、権威による補償など一切なくても正しいのであり、普遍的有効性を持っていたのである。」

アンドレ・ゴルツ『労働のメタモルフォーズ』1988年

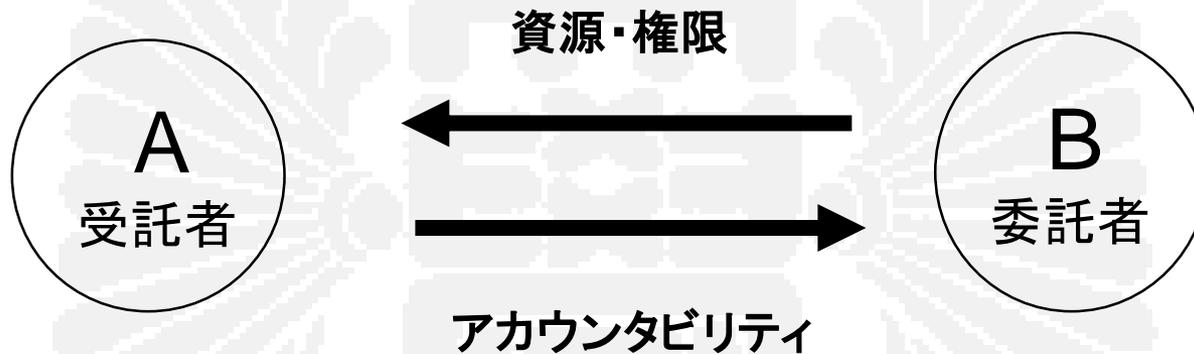


会計の根本原理

- 会計を指導する2つの原理：
 - ① アカウンタビリティ(受託責任の解除)
 - ② 意思決定有用性(情報提供)
- アカウンタビリティは未来(目的)を消費した後の過去, 意思決定有用性はまだ生じていない未来を対象とする
→ アカウンタビリティの会計としての枠組みの中で, 2つの原理が混在するところに, 現代会計の混乱の原因がある
- 人々に目的を与えるためには, アカウンタビリティから解放された会計が必要

アカウントビリティの概念

- 契約等に基づく資源・権限の委託・受託の関係から生じる責任(何らかの制裁を伴う)



- 資金の委託受託関係→組織外部への責任
- 権限の委託受託関係→組織内部での責任
→経済は階層的なアカウントビリティの連鎖で成立している

暴走するアカウントビリティ

- 測定値を判断の代替とする傾向が強まり、物事の本質が議論されない傾向が強化される
 - 人間の評価が数値に還元される
 - 目的と手段の混同が起きる
- いったん測定に執着すると、測定は多ければ多いほど良いと信じてしまいがち
 - 一番簡単に測定できるものしか測定しない
- 報酬が測定実績に紐づけられると、必ず測定執着が改竄を招く

ジェリー・Z・ミューラー『測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか』2018年

アカウントビリティの強化がリスクを招く

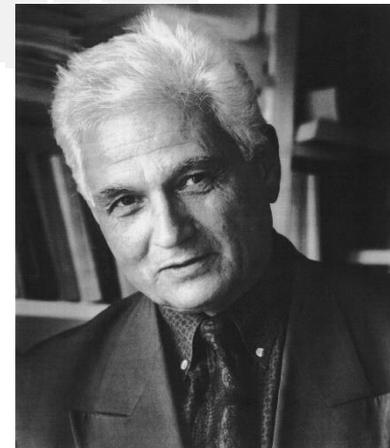
- 産業技術の高度化による「リスク社会」(ベック『危険社会』1986年)
- リスクを回避するためのアカウントビリティの強化
→アカウントビリティを拡充すると拡充される側が防御行動にでる(自らの責任の範囲を限定する)
- 専門家の主観的判断からの逃避(ポーター『数値と客観性』1995年)
→マニュアル化, 規則化, エビデンス化……
- 責任を限定すれば, 誰の責任でもない部分が残る
→制御できないリスクが蓄積される
→歴史的惨事:リーマンショック, 福島原発事故, 新型コロナ等

⇒責任の範囲を限定する限り, 問題は解決されない

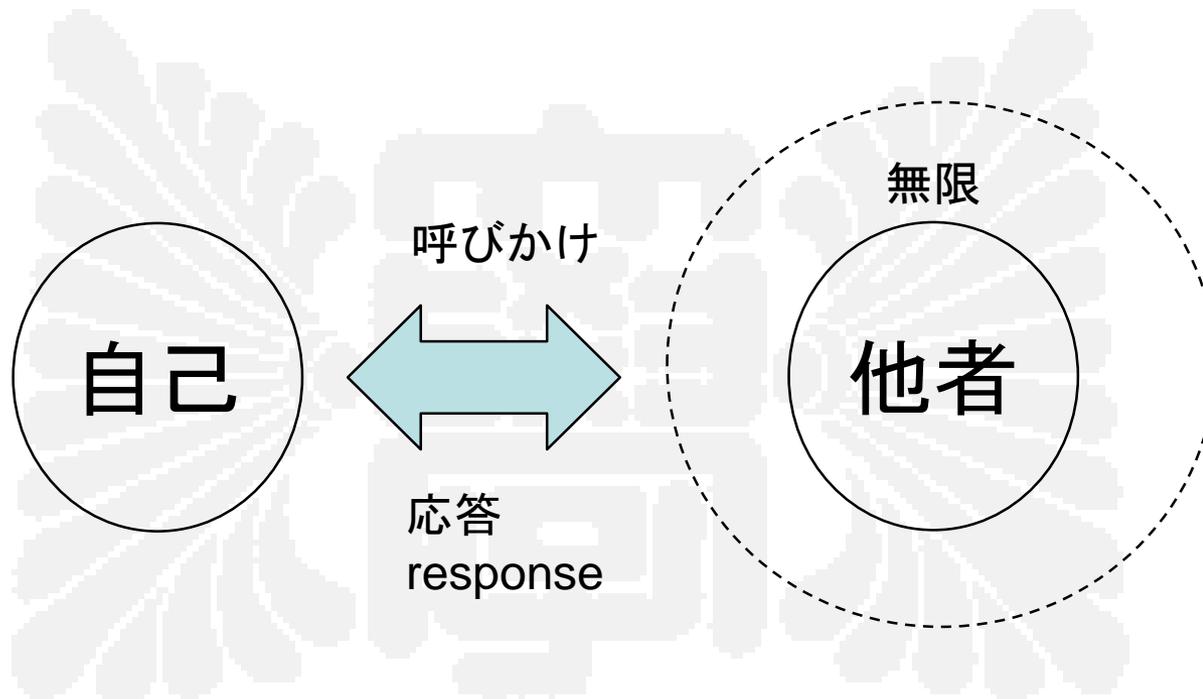
責任(レスポンスビリティ)の無限性

「責任の無限性を捨てれば、責任は存在しないと私は言いたい。他者についての責任が消去不可能であるのは、私たちが行為し、私たちが無限のうちに生きているからであります。…もし、責任が無限でなければ、道徳的、政治的問題はありえないでしょう。責任が有限でなくなった瞬間にはじめて、道徳的、政治的問題があり、それに伴うすべてが存在するのです。」

デリダ「脱構築とプラグマティズムについての考察」1996年

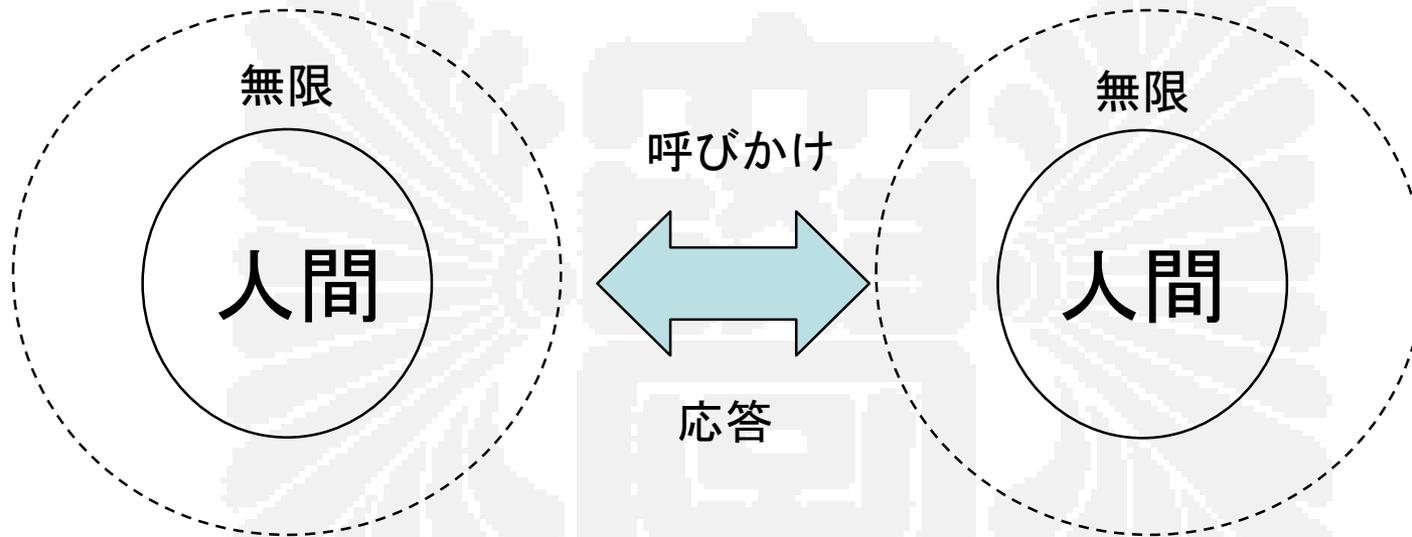


レスポンスビリティの考え方



- ・自己の他者への責任は限定できない(責任の無限性)
- ・他者は自己に対して無限に存在する

レスポンスビリティの世界



- ・責任関係は一方向ではなく双方向
- ・責任は「委託者」にも「受託者」にも存在する
- ・無限責任のネットワークが地球を覆う
→贈与, 歓待, 証言, 赦しの世界

計算による未来の先取りとその呪縛

- 絶対的債権者としての神の存在
→ 原罪に対する永遠の許しを乞う存在としての人間
- 神への債務を計算によって有限の債務に転換
→ 未来をすでに生じた過去として消費したことに対する責任
(アカウントビリティ)
- 経済の自己運動によって、未来の債務が膨張
＝ 財産が人間の生命期間を超えて拡張
→ ①大規模な環境破壊、②経済格差、③社会の仕組みの崩壊
- この循環を止める会計(計算)は可能か？

計算と生命

「計算は、規則通りに記号を操るだけの退屈な手続きではない。計算によって、人はしばしば、新たな概念の形成へと導かれてきた。そして既知の意味の世界は、何度も更新されてきた。人間が現実を計算しているだけでなく、しばしば計算こそが、新たな現実を立ち上げてきたのだ。」

森田真生『計算する生命』2021年



計算で未来を開くには

- 計算は、人間の認知の幅を拡大し、かつ分割することによって、未踏の未来(人間の可能性)を開きかつ閉じてきた
→アカウンタビリティとしての会計は、計算によって開いた未来を閉じること
- 未来を開くための会計
取得原価(historical cost)から公正価値(fair value)へ
株主持分(stockholders' equity)から社会的持分(social equity)へ
結果報告からシナリオ分析(TCFD提言)へ
- 未来を開くための会計にアカウンタビリティを求めるとその可能性を閉じてしまう→レスポンシビリティの会計として定式化すべき

アカウントビリティの会計 から レスポンシビリティの会計へ

- アカウントビリティ(有限責任)の世界
→「債務」(受託責任)の確定と返済
基本原理: 正確性, liability: モノローグ型会計
- レスポンシビリティ(無限責任)の世界
→未来の創造とそのための目的の提供
基本原理: 開放性, equity: ダイアログ型会計
- 未来社会を予測し, 行動するための会計はレスポンシビリティの会計でなければならない。それをアカウントビリティの会計として構築すれば, 会計によって問題が増幅される

レスポンスビリティの会計としての サステナビリティ会計の可能性

- TCFD提言による情報開示 (ISSBやSECで基準化予定)
気候変動に関するリスクと機会の情報開示。未来に対するシナリオ分析を提唱
→ 将来の世界を議論し、目的を定めるには有効。しかし、未来の推定は不確実性が極めて高く、そこにアカウンタビリティを求めると逆効果の危険がある
- インパクト加重会計
企業が従業員、顧客、環境へ与える影響を財務諸表で反映させる会計
→ 企業に多元的な目的を追求するための手段として設計すれば有効だが、測定 of 正確性を追求し、比較可能性などを追求すると手段が目的を拘束する恐れがある

まとめ

- 目的を消費した後の会計(アカウンタビリティの会計)と、まだ来ぬ未来のための会計(レスポンシビリティの会計)は峻別すべき
- サステナビリティ会計は、目的を達成するための会計ではなく、目的を与えるための会計として活用すべき、そうすれば「社会は繁栄し、世界は存続する」。

計算不可能なものへの接近

「計算可能な尺度が、計算不可能なものおよび計算不可能なものへの接近を可能にもするのである、それ自体必然的に計算可能なものと計算不可能なものの中で未決定にとどまる接近を。」

デリダ『ならず者たち』2003年

